
夜なのに真昼間

kakio

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜なのに真昼間

【Nコード】

N3647F

【作者名】

kakio

【あらすじ】

想い出によって生きてこれたのか。想い出があるから今現在に納得できないのか。

記憶を辿る時、いつも混乱してしまう。

思い出があるから、このくそつたれな世界を何とか今まで生きてこれたのか。

それとも、思い出があるからこそ、今現在がくそつたれな世界だと感じてしまうのか。

もちろん、記憶というものが不確かで、欠落した場所を都合のいいイメージで埋めてしまう傾向があるということはわかっているつもりだ。ノスタルジー、時間は遡れない。

そして、勝敗の決まった勝負事を始める。その不完全な記憶と現在の状況とを比べ合わせてうんざりするわけだ。

何やってんだろうな俺、と。

10年後の俺は、今の俺を輝かしいものとして思い出さるうか？
ありえない、と光速で答える。ありえない。

くだらない、と毎回思いながら考えるのを止める。また、こんな堂々巡りをするんだらうなという予感を抱えながら。

ドアベルが鳴った。

凄まじいほどの倦怠感を体に覚えながら、ドアを開けた。

「初めまして。こちら、保険勧誘員ですけど？」 同年代ぐらいの女性が単刀直入にこう切り出した。何だこいつは？ と軽く思わずにはいられなかったものの、凄まじいほどの美人だったので少々お話ししようという気になった。若い頃のジョディーフォスターみたいだ。

「ところで、あなた様は何か保険に入っていないらっしゃるのでしょうか？」 入ってないです。

「お年は？」25です。

「あら、ほんとですか？20ぐらいに見えますけど？」お世辞をどうもありがとう。

5分程度話した後、美貌に比べてあまりに典型的な保険勧誘員の発言の連発にさすがにうんざりしてきたのでお引取り願おうと思っただころで、彼女はこう言った。

「あなたは神を信じますか？」

保険と思ったら、宗教かよ。さすがにこれはルール違反じゃないの？と腹が立って思わず「美人だからって何でも許されると思ったら大間違いだよジョディーフォスター！」とシャウトしていた。

自分に唾然としたが、彼女はまんざらでもないゴージャスな微笑みを浮かべながら「私は神です。あなたの心に巢食う闇を取り払いに来ました」と穏やかに言った。

こいつはちよつと危ないぜ、法外な値段の訳のわからないご利益グッズをこり押しされそうだと危惧しているところで電話が鳴った。申し訳ないのですが電話ですので、とお引取り願おうとしたがさらさら帰るつもりはないようだ。厚かましい女だ。

ジョディーフォスター（似）を窮屈な玄関に残したまま、電話を取りに行く。

「もしもし？」

「ああトシ？ 私、私。今日仕事も楽だったし暇だから今からそっち行くね」

「それはいいんだけどさ、今変な人が来てんだよ」

「何？誰？」

「いや、俺もよくわかんないんだけどさー、保険勧誘い・・・」

んを言う前に保険勧誘員が部屋に入ってきて「ちよつとおーやめてよおー」といかにも俺が女にちよつかいを出しているような色っぽい声を上げた。

「ちよつと今の誰？ 何であんたの部屋に女がいんのよ？」

「いや、ちがうだつて。保険勧誘員が俺の部屋にいきなり入ってきたんだよ。不法進入だよこれ！」

「はあ？ 何時だと思つてんの？ 夜の１０時に勧誘しに来るバカがどこにいんのよ？」

「マジだつて。ジヨディーフォスターみたいな女が・・・」

電話が切れた。なんてことしてくれるんだ馬鹿野郎。一度、浮気が見つかって殺されかけたんだぞ俺は。今度こそ止めを刺しに来るに違いない。今の状況じゃどう考えても誤解する。１０時だと？ 外は真昼間じゃないか。

「あの女はあなたに釣りあわないわ。別れて正解よ」

ハイヒールでベッドの上に仁王立ちしている姿は中々の神々しさを醸し出していたが、そんなことに構っている暇はなかった。

「あんななんてことしてくれるんだよ。釣りあわないってあかり知ってるのかよ？ というか何者だよあんたは？」

「言つたじゃない。私は神なのあなたにとっては。さて、今からお楽しみタイムよ。あの女にガツンとやっていると見せ付けようじゃないの」

「冗談じゃない。あかりは約30万km/sの光の速さで飛んでくるに違いない。やってる所なんて見られたらそれはもう魂までぐちゃぐちゃに潰される気がした。俺と同年で、3年前に出会った。それは全くの偶然で、というより出会いなんて偶然でもあり、必然でもあるだろう。趣味なんて丸でバラバラだけれど何かと気があった。1年前に浮気した時は本気で俺を殴った後で泣いた。その姿を見て、顔の痛みじゃなく心の痛みで俺も泣いた。くだらない退屈な仕事の愚痴をいつも聞いてくれた。俺にはもつたいないぐらいの美人だ。二度と手放したくなかった。二度と泣かすものかと思った。だけど、俺は弱かった。だから、こんな女が来るんだろう。圧倒的なイメージで俺を追い立てるんだろう。対決を煽るんだろう。」

俺はフローリング張りの床にどすんと胡坐をかいた。

神々しい笑顔をこちらに向け、七色の光を輝かせながらベッドに突っ立っている女を見た。

まったくもってゴージャスだ。

あかりはもうすぐ到着するだろう。

どちらかなんて鼻から決まってる。

例え、全てが消し飛んでしまってもだ。

夜10時過ぎの真昼間の上空に、ひときわ目立つ明かりの塊がピンポイントでこちらに迫っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3647f/>

夜なのに真昼間

2010年10月22日00時07分発行